

日本労働社会学会 『通信』

vol. , no . 6 (2004 年 6 月)

日本労働社会学会事務局
〒194-0298 東京都町田市相原町 4342
法政大学大原社会問題研究所
鈴木 玲 (すずき あきら)
TEL:042-783-2317 (研究室直通)
FAX 042-783-2311 (事務室)
e-mail : suzukiak@mt.tama.hosei.ac.jp
(学会ホームページ) <http://www.jals.jp>

(郵便振り込み口座番号)
00150-1-85076
「日本労働社会学会 村尾祐美子」
(銀行振り込み口座番号)
東京三菱銀行 大塚支店
普通 口座番号 1519051
「日本労働社会学会 会計 村尾祐美子」

目次

労働社会学会第 16 期第 5 回幹事会議事録

研究会の報告

山根清宏氏「引越屋」の労働世界を聞いて (鎌田とし子)

各種連絡

- (1) 次回幹事会および 7 月定例研究会のご案内
- (2) 会員異動

労働社会学会第16期第4回幹事会議事録

労働社会学会第5回幹事会議事録

- ・日時 2004年5月29日(土) 12:30～14:00
- ・場所 専修大学1号館12階社会科学研究所
- ・出席者 辻、市原、小川、柴田、白井、鈴木、高橋、兵頭、藤井、藤田、松戸、村尾。

議題

1. 研究奨励賞候補について

高橋研究担当幹事より、現在までの推薦経過について報告された。

2. ジャーナル編集委員会

鈴木事務局担当幹事より、欠席した清山ジャーナル編集長の依頼により、ジャーナルへのエントリーが7本あり、現在、査読者への依頼を行っている旨、報告された。

なお、これと関連して、事務局へ、学会への入会申し込みとエントリー問い合わせのあった1件について、議論の結果、事情を考慮して追加エントリーを認めることとした。

3. 大会準備

小川大会準備担当幹事より、時期大会のシンポジウムテーマを、大きく日本の労働・雇用状況変化についてとする方向が報告され、議論の上、さらにキーワードなどを今後絞っていくことが確認された。

4. 会計関係

村尾会計担当幹事より、退会者への会費請求についてどうするか、との提起があり、会則に沿って退会年度まで払ってもらうことを確認した。

また、辻代表幹事より、奨励賞についての寄付を募る件について質問があり、次の通信で再度提起することが確認された。

5. 会員異動

の(2)を参照。

研究会の報告

「引越屋」の労働世界を聞いて

報告者：山根清宏

評者：鎌田とし子

長期化するデフレ不況のもとで、失業者人口はかつてなく膨れ上がり、日本の労働慣行であった正社員の終身雇用制度は崩壊しつつある。大企業でさえ合理化解雇のあと多様な呼称による非正規雇用労働者にきりかえ、今や臨時的というよりも既に恒常化した労働力として配置している。雇用構造の転換が進む中で、若年層でさえ正社員化の展望は持てず、客観的にはフリーターと同じような生活の長期化を余儀なくされているのだが、他方で規則に縛られず「定職に就かない新自由人」のイメージもあって、「自由な身分」を捨てきれないのではないかと思うふしもある。しかし昨今30代、40代になっても定職に就けない、結婚もできない現実が突きつけられてくるなかで、生活不安と世間体の上でも肩身の狭い思いにさいなまれるようになってきている。2001年2月に日本労働研究機構が行った「大都市の若者の就業行動と意識」調査によると、フリーターの47%は「モラトリアム型」、39%が正社員を希望しながらなれなかった「やむを得ず型」、14%が歌手や役者になりたい「夢追い型」に分類されるそうであるが、主観的にはともかく、先の見えない生活によくとどまっていられると不思議に思うことがある。親にパラサイト出来る間はよいが、無期限に許される身分ではない。この不可解な疑問を解く一つの鍵を提供したのが本報告であった。

報告者は、自ら「引越屋」A社K事業所の非正規雇用者として荷運びに従事しつつ、この「専門ムーバー」たちの労働世界を描き出した。参与観察でなければ体感できない意識の次元にまでおりて、正社員になりたくてもなれない彼らの鬱屈した心理に焦点を当てながら、「呑み」という会を通して仲間集団に強い帰属意識を持つにいたり、やがて安住していくという、社会学的な方法を駆使している点が注目される。

本報告によると、正規雇用者はドライバー9名、事務員4名だけで、このほかに、非正規雇用者は荷運びに従事する「専門ムーバー」11名、週2日の「学生ムーバー」、荷造りをする「ヘルパー」約20名、「アルバイトムーバー」約10名、女性「事務員」5名の計62名であるから、非専業者率は79%に達する。サービス業における雇用形態としては今日一般化しており、全国統計で非正規化率が4割を越えるであろうとされる実体を体現している事例である。

ここで分析の対象になっているのは、「専門ムーバー」から中高年3名を除く「若年専門ムーバー」のうちの5名である。彼らはすべて非正規雇用身分であり、会社の方針で何年

いても正規にはなれないし、賃金も熟練を積んだからといって上がるわけではない。時間給1200 - 1250円で、平均月収は20万円、年収300万円前後という低賃金であり、社会保険もない。この完全な閉塞状態の中で、何年も(3 - 8年)とどまれるのはなぜなのか。この事例は決して特殊ではなく、今日主流をなしつつある雇用形態であることを考えると、きわめて意義のある研究であったと思われる。

以下は、報告を私なりに解釈した「解」である。

1、彼ら全員は、正規雇用者になりたいと望んでいる。

親も期待しているし、本人も世間的に肩身の狭い思いをしている。が、たとえば工場労働のようなおもしろくない反復労働はしたくないと思っている。

2、「ムーバー」の仕事はやりがいがある。

お客に接し、喜んで貰える対人サービスには面白さがある。組作業で段取りを決め、役割分担をしてスムーズに荷運びをする。経験を積み、熟達して「仕事の出来」が仲間に認められることで、集団内の地位を獲得できる。「ドライバー」という正社員に対しても同じ尺度で評価を与え、そこでは対等になれる。依頼主によって仕事は多様で、単なる反復ではない工夫が要り、やり甲斐がある。「仕事」に没頭して夢中になるとあらゆる葛藤から一時的に解放される。お客の要求にこたえ、無駄なく正確に仕事が終わったときの達成感・醍醐味は何ものにも代え難い。

3、職場内での相対的地位の優位性。

正社員に登用される途が閉ざされているなかで、運転手であり現場責任者でもある「ドライバー」に対しては、「かれら、やつら」として深い一線を画すが、その他の従業員に対しては意識の上で優位性を保っている。優位性の根拠は「専門」であることと、「仕事の出来」である。何でもやるフリーターとは違う「誇り」、客観的にはそれほどの熟練がいるとも思えない「仕事」であるが、仲間内で評価される「仕事の出来」具合、これには段取り・荷造り・さらに重い荷の運搬作業が含まれるが、熟練といえるかどうか判断に迷うものの、確かにちょっとしたコツは要る。同じ職種でも、50歳前後のムーバー、雇用日数の短いムーバーたちは差異化・序列化の対象になる。まして学生・アルバイト・ヘルパーなどはより下位に位置づけられ、自らを一つの層として肯定的に捉えている。

4、職場内地位を自他共に認識させる装置としての「呑み」の会。

「専門ムーバー」にしか誘いがかからない月1回の「呑み」会は、他から明確に区別される唯一の「居場所・拠り所」であり、自己確認の砦である。そこで話される内容は、「仕事」に関する情報交換、相互の技術向上、仕事の今後や改善点などが主であるが、当然娯楽や異性のことで盛り上がりを見せ互いに親睦を深めていく。だが、個々人の今後の進路や、将来に関する話は申し合わせたように話題に上ることはない。仕事にやりがいを感じて作業中に没頭していても、年齢とともに体力が衰える不安からは逃れられないのである。それを一時忘れさせてくれるのが「呑み」を通じる仲間集団であり、癒される反面、思い

切って外の世界に飛び出せない一因にもなっている。

5、つよい居場所への執着。

正規雇用への強いあこがれ、いつか来る体力の衰え、将来展望の無さ、その不安故に話題にするのを避ける彼ら、逃げているとしか思えない生き方は、一体どこから生まれてきたのであろうか。報告された5名の経歴の中に一つのヒントがあるように思えた。つまり5名のうち、高校中退2名（B氏・D氏）と、高卒ではあるが引きこもり経験のある者1名（C氏）が目を惹く。高校卒が当たり前になった現在、初就職期に出遅れ感があって正規雇用の職に就けなかったのではないか。その引け目は、たまたま入職した「引越屋」で同じような仲間を得て、「呑み」会は他に代え難い安住の地になったのではなかろうか。

労働して生活を立てる、自らの仕事に生き甲斐を持つ、それは現代の若者にとって見上げたことであるが、問題は雇用の不安定さ故に長期の生活設計や将来の見通しが立たないところにある。主観的にはともかく、客観的にはフリーターと同じ身分である。こうした人々にこそ強固な社会保障制度が必要なのであるが、呑み会の話には一切登場しない。思想云々の遙か手前で行動に移せる「組織と団結」によって解決を図ろうとする思考は全くないのはなぜか。彼らの語りの中に出てくる「俺的にはー」という言葉の中に、私的な閉塞空間に閉じこもって出てこようとしない「政治離れ」をした若者のすがたを見ないわけにはいかない。

ここに取り上げられた労働者はけっして少数派ではなく、日本経済を支えている多数派である。今後も、職種は違っても同じような労働者が大半を占めていく。森永卓郎『年収300万円時代を生き抜く経済学』（光文社）ではないが、正社員がいなくなる日も遠くはないであろう。救いは、客観的にはフリーターであるにもかかわらず、仕事に生き甲斐を持ち仲間と居場所を創り出して生きている労働者がいるという事実であった。

この報告は、労働者を取り上げる際に半ば常識化したルールを省略し、一步心理的な領域に踏み込んで、そこで働く人の内在的な論理をえぐり出そうとしたところにある。成功の鍵は、参与観察法にあった。また「引越屋」を対象にした意図は、不安定雇用といえども常に女性パートが引き合いに出されるが、今日では男性の中に同じ低賃金労働者が分厚く堆積されている事実を直視したいという、「従来のジェンダー研究の裏を衝く」問題意識があるとおもわれた。第3次産業の若年男子や、中高年男子の多様な「現代の職業」についてのレポートが、今後出てくることを期待したい。

なお研究会では、報告に1時間半、討論に1時間が当てられる。本報告のあとにも討論の部で会員から様々な意見が出され、次のステップの参考になったと思う。つづく呑み会では、報告者は0円、無職者は1000円という伝統は守られており、意見を求めたい人、投稿したい人、顔を見知っておいてもらって就職につなげたいと思う人等々、若い人たちは大いに参加すべきである。

各種連絡

(1) 次回幹事会および5月定例研究会のご案内

日時：2004年7月17日(土)午後0時30分から幹事会。午後2時から定例研究会

場所：場所：専修大学神田校舎1号館12階社会科学研究所

定例研究会の報告者の報告テーマ：

報告者：呉 学殊氏(労働政策研究・研修機構研究員)

テーマ：パートタイマーの組織化と意見反映システム 同質化戦略と異質化戦略

* 『日本労働研究雑誌』2004年6月号、をご参照いただければ幸いです。

(2) 会員移動(敬称略)

・新入会員

・ 鶴沢 由美子(うざわ ゆみこ)(日本大学)

・ 神野 賢二(じんの けんじ)(一橋大学大学院)

・ 吉川 光洋(よしかわ みつひろ)(東京農工大大学院)

・退会

・ 松永 泰輝

以上